

G

グランシップマガジン
[ジー]

GRANSHIP magazine
SEPTEMBER 2003 第20号



次代を創る顔⑩
new comer

塗り下駄職人 **鈴木 千恵**

しずおかアーティスト・リレー②

立体作家 **岐部 琢美**

SPECIAL

源氏物語

和に親しむ

SERIES わが羅針 第20回

山口小夜子

「私のクリエイション。」

小特集

扉への扉。G.の扉世界へ

TAKASHI KITAMI

北見 隆 展

村松友視の文化漫遊⑥

「ワイパーの世界」

源氏物語

和に親しむ

平安の世に生まれた世界最古の小説が、千年の未来に投げかけたものは、単に物語の楽しさだけではなかった。和歌や紋様、音楽、舞、香、遊び……。そうしたエレメントを糸口に、雅にふれる楽しみ。それもまた源氏の魅力。そして、今、グランシップから、千年の和の世界へ。源氏の秋、ふたたび。

「源氏というお山には、どこから登ってもいいの。近道してもいいし、景色を眺めながらゆつくり頂上を目指してもいい。その人の人生の持ち時間によって選べるから」

そう語ったのは、源氏物語の現代語訳でも知られる、作家の田辺聖子氏だった。確かにそうでもなければ、全五十四帖からなる読み物が、長大だの、難解だのといわれながら、千年のロングセラーを続けられるわけがない。となると、問題は「どこから登るか」だ。そこでグランシップがこの秋用意したのが、「雅楽」と「香り」という、二つの道である。

物語を書き綴りながら、作者紫式部が筆先に聞いた雅楽とは、一体どんな音楽だったのか。また、源氏を取り巻く女たちの袂に、彼女はどんな香りを焚きしめたのだろうか。その一端を体験し、うかがい知ることから拓かれていく、源氏物語の世界。

今に通じる共通項を見つけたたり、現代では味わえない異世界として楽しんだり。道に散り敷かれた和の心、雅びな風を感じつつ登る源氏の山は、どれほど我々の心を豊かにしてくれるだろう。いずれにしろ、なかなか巡り合えない機会である。ぜひ、お見逃しなく。



図は、源氏物語の第二十四帖『胡蝶』に登場する遊楽の場面。紫上の局の庭にある泉水に、唐様の龍頭鵠首の船を浮かべ、雅楽寮の楽手や若い女房達が乗船。源氏や螢兵部卿の宮からも雅楽のひとつときを楽しんだ。

ことごとき高麗 唐土の樂よりも
東遊の耳馴れたるはなつかしくおもしろく

(若菜下)

写真の樂器は、「笙」しょう。匏ほうという器に十七本の竹管が挿してあり、その姿から、別名「鳳笙」。吹きはじめたら曲の終わりまで途切れることなく鳴り続け、その音はまるで天に立ち上るかのようにあたりを支配する。おそらく多くのの人にとって、永遠や無限を暗示させる笙の音色こそが、雅樂であり、日本の音なのではないだろうか。歴史は古く、日本の有史以前、紀元前の殷代の古文書に、笙はすでに甲骨文字をあてて記されているが、その字が「和」とは、実に興味深い。

雅楽の世界

今日の試楽は青海波に事みな尽きぬな
いかが見たまひつる

(紅葉賀)



紅葉の下、光源氏は
頭中将と「青海波」を舞う。

源氏物語の作者紫式部は、
読者が雅楽に精通していること

を前提に書いたの
だろう。物語には
雅楽のシーンが数
多く登場する。中で
も最も印象的に描
かれているのが『紅
葉賀』（もみじのが）の巻
で、朱雀院の前で光源
氏と頭中将が、この
世のものとは思えぬ
美しさ“と讃えられた
舞楽『青海波』を舞う
場面がある。若き源氏
の気高さが周囲を圧倒
する名場面で、源氏絵と
呼ばれる屏風絵には大抵
このシーンが描かれている。

ほかに『蜩』の巻に『打球
楽』、『胡蝶』の巻に『迦陵
頻』（かりよびん）、『若菜上』に
『納曾利』（なそり）など、文中に
はさまざまな舞が登場。こうし
た雅楽の様子は、雅のエッセンス
として物語を盛り上げるだけで
はなく、そこにある空気感や心
の有り様を如実に伝えてくれる
大切な要素ともなっている。

紫式部が生きた時代こそ、
雅楽の絢爛期だった。

雅楽は、日本で最も古い伝統
を持つ音楽である。とはいっても
の、そのすべてが日本の純血
種とはいえず、その起源系統
から見て、日本古来の歌と舞
（国風歌舞）にぶりのうたまゐ、古
代アジア大陸から伝来した器
楽と舞、平安時代に宮廷貴族
によって生まれた歌物、この三
種類の音楽の総称が雅楽であ
る、と考えるのが正しい。

奈良時代、律令国家として
形を整えた日本は、治部省に
「雅楽寮（うたまゐのつかさ）」とい
う職種を設けて、音楽を統括
するようになる。さらに平安時
代の楽制改革によって、ほぼ現
在の形に整えられた雅楽は、十
世紀半ばより公家社会の趣味
教養として絢爛たる隆盛を迎
える。紫式部が生きたのは、ま
さにこの時代。雅楽全盛期だっ
たのである。

天の声、空の声、地の声。

雅楽には、「管絃」「舞楽」「歌
物」という三つの演奏形態がある。
管絃とは、大陸系の雅楽器

による器楽合奏であり、雅楽の
演奏会で最初に奏されるのが、
この管絃である。通常は「三管
両絃三鼓」（左ページ図参照）で構
成され、とくに重要な役目を
果たすのは、管楽器だといわれ
る。笙は空から射す光、箏は空を
大地に歌う人の声、笛は空を
翔る龍の声に喩えられ、目を閉
じ、それぞれの音世界に耳を澄
ませば、なるほど、験の奥に壮
大な宇宙が広がっていく。

さて、プログラムでは、管絃の
後、音楽と舞による「舞楽」が
始まる。渡来の系統によつて、唐
楽の舞の左方と、高麗楽の舞の
右方に整理され、それぞれを左
舞、右舞と呼ぶ。原則として左
舞は赤系、右舞は青系の装束を
身につけるので、視覚からその
伝来を憶測・鑑賞しつつ、その
違いを見つけるのも楽しい。

また、歌物とは、雅楽器の伴
奏で歌う音楽で、農民が租税
を都に運ぶ際に歌ったものに貴
族が伴奏をつけた「催馬楽（さい
ばら）」や、漢詩に旋律をつけた
「朗詠」がある。

一説によると、雅楽（ががく）と
いう言葉そのものは、明治時代
につくられたものだとか。確か
に源氏物語の中でその言葉を



管絃の基本は「三管兩絃三鼓」。三つの管（笙、箏、笛）、二つの絃（琵琶、箏）、三つの鼓（羯鼓、太鼓、鉦鼓）で構成されることが多い。



Photo：林 陽一

①【笙】(しょう)別名「鳳笙」。通常6音または5音の和音を奏す。②【箏】(ひちりき)雅楽器の中で最も小さく、最も大きな音の出る縦笛。主旋律を奏す。③【龍笛】(りゅうてき)音域が広く、その名は龍の鳴き声に由来。④【高麗笛】(こまぶえ)笛笛とも書く。龍笛より穴が一つ少なく、高く鋭い音色。⑤【神楽笛】(かぐらぶえ)別名「やまと笛」。神話にも登場し、主に歌の伴奏に使われる。⑥【楽琵琶】(がくびわ)永遠の時間に楔を打ち込むかのようなその音色は、管絃と謡物の伴

奏に用いられる。⑦【楽箏】(がくそう)俗称「こと」。俗箏に比べ、絃が太く重厚な音色。⑧【和琴】(わごん)日本固有の楽器で一名「やまとこと」。⑨【楽太鼓】(がくだいこ)管絃と通常の舞楽に用いられる。火炎の飾りは龍と鳳凰の2種がある。⑩【鉦鼓】(しょうこ)釣太鼓と一対で管絃と通常の舞楽に用いられる。⑪【羯鼓】(かっこ)管絃と左方の舞楽に用いられ、装飾には時絵が施されている。⑫【笏拍子】(しゃくひょうし)歌いながら一拍打つ。神楽歌では二人、他は一人で奏す。

我々が日常で使っている言葉に、雅楽に端を発するものも少なくはない。例えば、「むやみに」という意で使われる「やたら」という語は、二拍子と三拍子の混合拍子、雅楽の「八多羅(やたら)拍子」から来たものであり、「ろれつが回らない」「ろれつ」とは、雅楽の旋法である「呂」「律」

森羅万象、宇宙の秩序を雅楽の世界にみる。

見ることはなく、単に「楽」、あるいは「御遊び」「管絃」などと表現されているので、それらを手掛かりに物語の中の雅楽を掘り起こしてみるのも一興だろう。

に由来する。だから、それは我々が思うほど遠いものでもないのかもしれない。

とはいえ、雅楽から創出される世界観があまりに壮大で深遠であるため、日常に根を張るという類のものではないこともまた確かだ。音や舞に、宇宙の森羅万象の意味を込め、その組み合わせから宇宙の秩序を示し、鑑賞する人の感情に直接訴えかけるといふよりは、喜怒哀楽という域の一つ上、心の純粹な高揚を誘う、雅楽なるもの。時代を超越して、時代に迎合しない雅楽には、ほかのどんな音楽、どんなパフォーマンスにもない、不思議な魅力が宿っているのである。



協力：浜松市楽器博物館

香りの世界



このころの風にたぐへむには
さらにこれにまさる匂ひあらじ
(梅枝)

(写真上) 香炉。灰の中には熾した炭団が入っている。薄い雲母の板は銀葉(ぎんよう)といい、この上に香木を置き、たき出す。なお、香道に用いる香木は、6種類に大別されることから「六国」(りっこく)という。(下右) 左手で香炉を支え、右手は煙突を作って、香りを聞く。香りはその印象から辛、甘、酸、鹹、苦の5つの味「五味」(ごみ)にたとえられる。(下左) 点前をする人を香元と呼び、打敷、地敷の上に香道具を広げ、点前をする。



雅、されど遊び。
香りに聞く物語。

日本に香木が伝わったのは、仏教伝来と同じ、6世紀の頃。茶と香は仏様へのお供え物であり、当時はそうした仏事のほかに、薬用や、さらには薫物(たきもの)現在の香水がわり)として着物や部屋に焚きしめるという使い方があったが、平安の世になると、香はもっぱら貴族が楽しむためのものとなる。よって源氏物語など平安文学に登場するのは、薫物のみ。薫物は現代の練香にあたり、当時流行した歌合わせや絵合せにならい、各々調香した薫物の優劣を競う「薫物合せ」という遊びまでもがこの頃に誕生する。

源氏物語『梅枝』(うめがえ)の巻にも、そんな薫物合せのシーンが登場。源氏が六条院内の夫人らと楽しむ様子が描かれており、

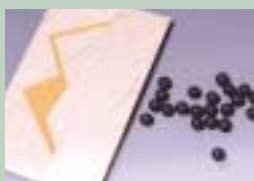


源氏香之図。例えば藤袴(右)は、右から2本目、5本目の上部が横線で結ばれている。これは2番目と5番目の香が同じであり、他の香はそれぞれ別物であることを示している。

それぞれの香の向こう側に登場人物の内面や感性を垣間見せてもくれる。

さて、この香遊びは、やがて香道として発達していく。いくつもの香木を焚き、その香りを嗅ぎ分ける楽しみ方「組香(くみこう)」が生まれ、その一つに「源氏香」と呼ばれるものがある。5種の香りの組合せ全52通りに、源氏物語の最初の巻「桐壺」と最後の巻「夢浮橋」を除く52の巻名をあてたことに由来する源氏香は、その香之図(写真参照)でご存知の方も多いのではないだろうか。

香道では、香りは「嗅ぐ」ではなく、「聞く」という。ほのかな香りの正体を繊細な趣の中で「あなたには誰?」と聞く。耳を澄ますように鑑賞する、世界唯一の嗅覚の遊び。そこには和の美意識のすべてがある。そういつても決して過言ではない。



源氏物語の時代は、香木をたたくのではなく、何種もの香木を砕いて粉にし、アマツル、梅肉、蜂蜜や麝香などを混ぜて、樹の根元に埋めるなどして練香を作った。

●チケット発売中

林陽一写真展

「源氏物語にみる雅楽」
— 楽器展併設 —

十一月一日(土)～十六日(日)



林 陽一

- ◆午前10時～午後5時
(入場は午後4時30分まで)
- ◆6階展示ギャラリー
- ◆一般・大学 500円(当日600円)
中・高校生 250円(当日300円)(税込)

源氏物語に登場する雅楽の演目を、舞台写真に原文、現代語訳、舞の説明などを添えて紹介。物語の中で雅楽の場面はどのように描かれているのか。光源氏はどんな舞を舞ったのか、これでよくわかるはず。写真は、雅楽写真「雅の美」をライフワークとする、林陽一氏。雅楽の楽器展も併せて開催。

林 陽一(はやし よういち)
日本大学芸術学部写真学科卒業後、林嘉吉に師事。歌舞伎、雅楽など伝統芸能の舞台写真を学ぶ。’98年ドイツにて写真展「雅の美・GAGAKU」、’02年銀座・和光にて「雅楽 in 源氏物語」開催。雅楽公演プロデュースなど、雅楽の紹介・普及に務める。写真集に「雅楽奇具」ほか。現天皇陛下在位十年記念郵便切手には、氏が撮影した雅楽装束の文様「桐竹」「鳳凰」が採用された。’46年東京生まれ。

●入場無料(要事前申込)

雅楽講演会 「雅楽の楽しみ」

十一月八日(土)



東儀俊美

- ◆午後1時30分開場 午後2時開演
- ◆11階会議ホール・風
- ◆講師：東儀俊美

雅楽とは何?どんな楽器が使われるの?舞にはどのようなものがあるの?そんな疑問をやさしく解いて、雅楽の世界へ導いてくれるのは、雅楽界の第一人者、東儀俊美氏。日本人のDNAを呼び覚ます、興味深い話が聞けそう。

東儀 俊美(とうぎ としはら)
’93年宮内庁楽部首席楽長就任。御大喪、平成の御大礼などの奏楽、大嘗会における悠記地方風俗歌・風俗舞の作曲・作舞などを行う。出版物に「雅楽神韻」「雅楽への招待」など。’99年勲五等双光旭日章叙勲、’00年日本芸術院賞、恩賜賞受賞。’29年東京生まれ。
▼申込方法は、下記参照。

●チケット発売中

雅楽公演会

「いま甦る千年の時」

十一月十六日(日)

- ◆午後1時30分開場 午後2時開演
- ◆中ホール・大地
- ◆全席指定(税込)※未就学児入場不可
1階席 5,500円 2階席 4,500円
- ◆出演 十二音会
- ◆演目 第1部/雅楽概要・楽明
(特別出演:東儀俊美)
第2部/管絃「越殿楽」ほか、
朗詠「嘉辰」
第3部/舞楽「陵王」「貴徳」
「萬歳楽」

◆演目解説

【越殿楽】(えてんらく)／雅楽の曲の中でも最も有名なもので、中学校の教科書にも登場。民謡の黒田節や仏教賛歌などにも編曲されている。
【嘉辰】(かしん)／漢詩は隋朝の詩人謝偃の作。他の朗詠は漢詩を訓読だが、この曲のみは音読で唱和する。
【陵王】(りょうおう)／容貌が美しかったため、戦では恐ろしい面をつけて大勝したという北齊の蘭陵王長恭の伝説を舞にしたもの。この舞は童舞としても舞われ、源氏物語の「若菜下」では玉璧の子が舞っている。
【貴徳】(きとく)／漢の宣帝の時代、匈奴の日逐王が降伏して貴徳侯になった由来を曲にしたもの。
【萬歳楽】(まんざいらく)／賢王の時代、鳳凰が飛んできて「賢王万歳」と囀ったので、その声を楽に、姿を舞にしたと伝えられる。



Photo:林 陽一

十二音会(じゅうにおんかい)

’77年に発足した楽師中心の雅楽演奏団体。演奏は、洋楽では12の半音から成る8度の音階を1オクターブというが、これは雅楽もまた12の音で成り立つことから「十二音律」といい、その名はこれに由来する。

●入場無料 有料体験あり(要事前申込)

香りの世界

十一月八日(土)～十六日(日)

- ◆午前10時～午後5時
(入場は午後4時30分まで)
- ◆6階交流ホール

◆香道の歴史と香の点前をパネルで紹介。香道具の展示も、

「香道体験」

◆11月8日(土)・9日(日)

- ①午前10時30分～
- ②午後1時～
- ③午後2時10分～
(一回約60分)

◆参加費(税込)
一般 2,000円 小・中・高生 1,500円

◆定員 各回10名
◆講師 横山隼月鶴(安藤家御家流)
源氏物語「葵」の巻の車争いの場面に材をとった「野々宮香」(ののみやこう)という組香が体験できる。
▼申込方法は、下記参照。



「練香体験」

◆11月15日(土)・16日(日)

- ①午前10時30分～
- ②午後2時～
(一回約90分)

◆材料費 2,500円(税込)
◆定員 各回20名
◆講師 菊谷勝彦
(お香専門店「香源」店主)

源氏物語の時代、貴族達の間で流行った「薫物」は、現在の「練香」にあたる。その香りの世界をぜひ。
▼申込方法は、下記参照。



「お茶体験サロン」(参加無料)

◆11月10日(月)～14日(金)

手もみ茶の試飲コーナーや緑茶インストラクターによる趣向を凝らしたオリジナル茶体験を。

協力：静岡県茶文化振興協会

●入場無料(要事前申込)

11月3日(月・祝)

チケット発売記念トークショー

グランシップ開館5周年記念事業

夢の浮橋～人形たちとの「源氏物語」～

◆午後1時30分開場 午後2時開演

◆6階交流ホール

◆出演 佐藤信(作・演出)、山口小夜子(人形デザイン)(予定)、
12代目 結城孫三郎、3代目 結城一条(結城座)

◆聞き手 山本肇(グランシップ館長)

来春3月のグランシップオリジナル公演のチケット発売を記念してのトークショー。本作品を書き下ろし、演出も手掛ける佐藤信氏と、パフォーマーとして活躍のかたわら創作活動を広げ、今回人形デザインにおいて参加の山口小夜子氏、さらには伝統の江戸あやつり人形芝居により独創的な源氏の世界を創出する「結城座」より12代目 結城孫三郎、3代目 結城一条が一堂に。それぞれの源氏物語観、本公演の見どころなど、魅力ある話が聞けそう。(→関連記事P11参照)▶申込方法は、右記参照。

【参加申込方法】

往復ハガキに氏名、住所、電話番号、参加人数を記入(返信用ハガキにも住所、氏名を明記)の上、下記まで送付を。(香道体験、練香体験については、時間も明記のこと)
締切は10/14(火)必着。応募多数の場合は抽選。結果は返信ハガキにて10月下旬連絡。

●あて先：〒422-8005 静岡市池田79-4
グランシップ(「雅楽講演会」係、「香道体験」係、「練香体験」係、「夢の浮橋」係のいずれかを明記)

扉への扉。

Gの扉世界へ。

「旧約聖書によると、神は土からアダムを創り、
イヴはアダムの肋骨から創られたという。
つまり、アダムは神の彫塑作品、

イヴは神のオブジェ作品ではないだろうか」

北見 隆



TAKASHI KITAMI

北見 隆 展

《預言書》

入場無料 2004 1/1(木・祝)～13(火)
AM10:00～PM5:00(最終入場PM4:30)
グランシップ6階展示ギャラリー3

静かなる存在感。G.表紙でおなじみの作品世界へ。



2002 第15号



2001 第10号



1999 第5号



1998 創刊0号



2002 第16号



2001 第11号



2000 第6号



1998 創刊号



2002 第17号



2001 第12号



2000 第7号



1999 第2号



2003 第18号



2001 第13号



2000 第8号



1999 第3号



2003 第19号



2002 第14号



2000 第9号



1999 第4号



《古い鏡》

「私の作品テーマをあえて一言で言うなら、“時間”は過ぎていくんだな、という無常観でしょうか。そして、それに対してどう生きるかということですね」



《12の兄弟》



《夢見機》

「博物館に行くと、壊れかけているものが真鍮のパイプで補強されていたりしますね。昔のものに、現代の素材を組み合わせることで、まったく別のものが形作られる面白さ。そんなことを一人博物館的にやっているんだと思います」



《古風な笑い》

《女預言者》

「絵は、完成予想がまず頭にあって、それに近づけていくという作業。一方、立体は創りながら考えていく。偶然性に引っぱられていくので、自分にもできあがりが見えない。そこが楽しい部分だと思います」

本展では、Gの顔となった二連の立体作品に加えて、イラストレーション、版画等およそ70点を紹介。これが静岡では初となる。北見作品は、とても静かだ。けれど、そこにあるのは沈黙ではなく、やわらかな語りである。静かな言葉によって観る者の心は浄化されていく。そんな静謐な感覚をぜひ、新春のグランシップで味わっていただきたい。

本誌Gは、今号で20号を数える。創刊以来、ページの増減など試行錯誤を繰り返してきた本誌ではあるが、それでもこれまで何かしら「Gらしさ」や「Gの顔」のようなものを保つてこられたのだとすれば、それは表紙を飾る北見作品のおかげといいたい。

北見氏の創作の出发点は、イラストレーションだが、Gでは立体作品を使わせていただいている。素材は、海岸に打ち上げられた流木や廃材、路上の鉄屑など。それらを“拾う”という行為そのものがアイデアス

「木にこだわるのは、不器用な素材のほうが面白いものができるような気がするから。粘土は、白い紙に絵を描くの似ている。私には自由過ぎる感じがします」

「学生の頃は、自分が天使を描くようになるとは思いませんでしたね」



《冬のダンス》



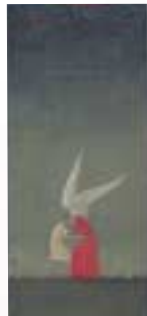
《使者》



《漁師と息子》



《西方航路》



《遭遇》



ホールとして素敵にエイジングを。

仲道 郁代・祐子（ピアニスト）

7月4日ウィーン室内管弦楽団と共演（中ホール大地）。

このホール（中ホール）は面白いですね。いわゆるコンサートホールですと、反響板が貼られていますから照明など機構的なものに制約があり、一方、お芝居専用の場合は、音響に限度があります。けれど、ここは両者のいいところがうまく取り込まれていて、しかも八〇〇名を収容する器にしては、隅々までちゃんと音が届くホールだと思います。（郁代）

他のホールとは、まず雰囲気の違いですね。音楽ホールは、ある意味、緊張感のある空間になりがちですが、こちらは座席もゆったり、クラシックでもリラックスして楽しめる空気を感じます。（祐子）

ホールというのは、生き物だと思えます。演奏者や観客次第で全く違うものになってしまう。私はクラシック音楽の素晴らしさを啓蒙するために「ゴメン！遊ばせクラシック」という試みを展開していますが、最も大切に行っていることはコミニケーションなんです。やはり一方通行では、伝わらない。それは、きっとこうした施設にもいえることです。グランドシッブはまもなく開館五年ですが、ステレオのエイジングのように、ホールとしての空気を重ねて、成長していくことができれば、素晴らしいですね。（郁代）



《復活》



《眠れぬ王》



《記憶の再構成》



撮影協力：池袋東武百貨店

北見 隆【きたみ たかし】

武蔵野美術大学卒業後、フリーのイラストレーターとして活動。東京を中心に多くの個展を開催し、絵本『夢から醒めた夢』、画集『時のない王国』など多くの作品を発表。また、赤川次郎著『三毛猫ホームズ』シリーズほか、教科書『現代社会学』『中学国語』などの装丁でも知られ、廃材を使った立体の作品も手がける。'02年末より銅版画作品も発表。'87年第13回サンリオ美術賞受賞。'97年『聖書物語』でプラスチラバ国際絵本原画ビエンナーレ金のリンゴ賞受賞。'52年東京生まれ。

昨年末から版画も始めたという北見氏。今秋、版画集を作成。さらに年末に向けて、作品集も発刊の予定。

北見 隆 展

TAKASHI KITAMI

入場無料 2004 1/1(木・祝)～13(火)
AM10:00～PM5:00 (最終入場PM4:30)
グランシップ6階展示ギャラリー3

同時開催

第2回 静岡の魅力 フォトコンテスト 入賞作品展

山口 小夜子

私のクリエイション。

「私は、表現者としての自分と、

創作者である自分とを分けて考えていません。

すべて私のクリエイション。

つまり結果よりも過程。

そこに人々の情熱やエネルギーがあるのですから」

垣根のとれた時代。

その人は、垣根のない時代に生きさせてもらっている、と語った。だから、こうしてさまざまなクリエイションに関われるのだと。ファッションモデル、ダンスパフォーマー、女優、デザイナー……。確かにその肩書きは多様だ。けれど、時代がどうあれ、その人自身もまた境界線を引くことはなかった。ボーダレスを叫びながらも、カテゴライズすることに慣れてしまった今という時代、創作世界を自由に生きるその人の姿は、美しく新鮮だ。

——以前、雑誌の対談であじやった“地球上にあるもので着れないものはない”という

言葉が、とても印象に残っているのですが、「それは私だからということではなくて、たとえばセーターがニットであるとか、羊毛だとか、あるいは石油からできた繊維かもしれないけれども、その元を辿れば、結局、私たちは地球上にあるものを着ている、ということなんです。だから、それを発展して考えていくと、今、私たちがお話ししているこの場所、この建物も纏っているという風にとらえられるのではないかと。空気や灯りも繊維の中に取り込んで着ている。そういう意識の持ち方もあるんじゃないかなと思うたりするんですね」

——ファッションモデルとしてだけでなく、ダンスパフォーマンスやお芝居など、広く表現者として活躍ですが、表現の面白さ、魅力はどんなところにあるとお考えですか。「一言でいうなら、クリエイションですね。結果よりも過程。そこに人々の情熱やエネルギーがあるわけですから。そもそも私は表現者としての自分と、デザインなどにおける創作者である自分を分けて考えていないです。撮影のためにモデルをしてスタイリングもする、ということもあるし、有名なデザイナーの方の服を着てカメラの前に立つ、ということもある。関わり方は作品によって違いますが、すべてはクリエイション。作品を創りあげる、その過程が大事であるし、そこが楽しいんだと思います」

——衣裳デザインはもちろんです、たとえば最近では、クラブシーンにおいて自身のニットによるCDJを使った音づくりが話題になりました。それも単なるDJという

より、オリジナルの音源を取り込んだり、ナレーションが入っていたり、かなりユークなものがついています。

「私の仕事はファッションにしる、ダンスパフォーマンスや舞台での表現にしる、あるいは撮影にしても、そこには服があり、装置や景色、灯りがあり、音楽もある。しかもそれらが同時にあって成立するわけですが、音は聞こえないけれど、音を流すことにより一枚の写真の映り方が変わってくるかもしれない——という具合に、私が携わる仕事というのは、すべて一体のもの、一連のものなんです。そうしますと、たとえば今度パリコレクションに発表するとしても、そうすると、そこで音楽をどうするかと。それは一つの重要な要素になるわけです。私はモデルという職業だけにこだわってきたのではなく、むしろクリエイションに対するこだわりがあったので、そうした部分に関わっていくことはごく自然なこと、こんな動きをこの音にのせよう、あの灯りの中に立たせよう、そんなことを考えるわけですね。日常生活の中でも、みなさん、そうでしょう。今日はこういう音楽で癒されたとか、今日はどこそここの社長に会つからスーツを着なくちゃとか、この灯りが好きだとか、自然に選んでますよね。ただ、それがたまたま仕事という、人の前に提示する作業だったりするから、日常以上にこだわらなくて、そうした提示するものの一つが洋服だったり、音であるというだけのことなんだと思いますけれど」

——とはいえ、多彩な分野で才能を求められ、なおかつそれを発揮できる人は少ないと思います。

「私が生きているこの時代は、ちょうどさまざまな垣根がとれて、一人がいろんなことに挑戦している時代になったという気がします。俳優さんがバンドを組んでいる、あるいは音楽をやっている方が小説を書いて賞をとられたり。一つのジャンルにこだわらない、そういう時代に今ようやくなったのかなと。それが正解かどうかは分からないけれど、

もう、ご自身の中では新たな試みというよりは、大括りのクリエイション、その一つということですか。

「そうですね。私と人形とは、自分の中では切り離せないものの一つなんです。ただ、これまでに人形になったことはあっても(SAYOKOMANEキン/ロンドン・アデル社)、人形をデザインするのは、実は今回が初めて。でも、子ども時代には欲しい人形が売ってなかったこともあって、自ら何度ものつくり



そうした垣根がとれた時代に、私は生きさせてもらっているような気がしています」

人形の起源から。

——では、来春グランシップで開催される舞台「夢の浮橋」人形たちとの「源氏物語」(P9 参照)における人形デザインのお話

しました。だから、今回は声をかけてくださって嬉しいなと思っています」

——すでにアイデアスケッチのようなものはおありですか。

「最初にお話をうかがったときに浮かんだイメージが、そのまま持続していますね。日本の人形の起源は、天竺(インド)から来て、子どもの健やかな成長を願う心を人形に託して川に流したものが、その始まり



【やまぐちさよこ】

ファッションモデル、ダンスパフォーマー、女優、エッセイスト。72年パリコレクションにデビュー。以来、毎年パリおよびニューヨークプレタポルテコレクションに出演。77年アメリカのニューズウィーク誌で「世界の6人のトップモデル」に選ばれ、ロンドン・アデルー社が「SAYOKO マネキン」を制作。世界各国のショーウィンドーを飾る。同時に映画や演劇、コンテンポラリーダンスなどの舞台活動で数々のクリエイションに参加。勅使河原三郎ダンスカンパニーにおける数々の作品では、欧米20ヶ所のツアーに参加し、国際エミー賞公演芸術部門優秀賞を受賞。96年「NOIJECT」でアトランタオリンピック・アートフェスティバル部門の公演に参加。また、天児牛大演出のオペラ「青ひげ公の城」「三人姉妹」では、衣装デザインも手掛ける。00年立花ハジメ企画・監修の5人のアーティストによるiモードサイト「The END Channel」に参加するなど、その活躍は多岐に渡っている。神奈川県横浜市生まれ。

トップモデルとしてはもちろん、これまで寺山修司、天児牛大、勅使河原三郎など、さまざまな舞台や映画に参加。「いずれも自然な出会いなんです。そんな自然な出会いが、結局は必然なのかなと思いますけれど」

だそうですけども、それは紙なんです。また、今、人気の陰陽師、安倍晴明が操り、呪いを被っていたのも式神という紙の人形なんですね。やがてそれがお雛様のように立体的なものになっていくんだけれども、今回は素材としてぜひ紙を使いたい。ただ、これは糸あやつりの人形芝居ですから、二本の手で人形を支えなければいけない。だから、耐えられる重量のギリギリのところ、その中で極力大きなものをと考えています。また、源氏物語ということで時代考証というものがあるのだけれども、佐藤 信(脚本・演出)さんは、あまり神経質にならなくていいと言ってくださっていて。そのかわり、当時について私たちが記号的に思っているようなイメージがありますよね。それをうまく取り込んでいければいいなと思っています。」

——佐藤信さんとは、幾つかの作品で一緒に結されていますが、佐藤作品の魅力とは、ズバリ、何でしょう。

「それは古くからある、あるいは日本に伝わってきたお芝居の原点をきちつと持ちながら、同時にそれをかなり壊して、飛び出していくというか。未来的に、あるいは破壊的に、一つの作品を崩し、突入していく面白さ。だから、佐藤さんとの仕事では、実験的なことも含めて、何でも受け入れられる自分でなくてはと思うんです。」

——同じく結城座さんとも、一緒にお仕事されていますね。

「日本の人形劇には、まず『文楽』というものが一つあり、もう一つが結城座さんの『糸あやつり』ですね。文楽は、義太夫との関係の中で成熟し、決してそこから外れない。一方、結城座さんは、人形のかたちや表現方法すら新たなものとして、まったく別の感覚、別の世界に溶け込んでいく。けれども、伝統はちゃんと守られているという、そこがすごく面白いところですね。私は、文楽も結城座さんも両方見させていたでいて、どちらも素晴らしいと思っています。すけれども、新たな人形の表現の方法として未来につなげていく、そんな結城座さんの姿勢は本当に素晴らしいと思っています。」

——グランシップでは、昨秋、今秋と『源氏物語』をテーマにした多面的なイベントを開催していますが、源氏物語という世界をどうご覧になっていますか。

「そこに描かれているのは、いつの世にもある、心のあり方ですね。男女の、あるいは女性同士、男性同士の心のふれあいや葛藤、そうしたものは変わるものではないなと。だから、今回の作品も、当時の心の美しさ、純粹さを今に通じるものとして置き換えて見ていただければと思っています。佐藤さんからの依頼は、女性の人形三体、男性の人形二体の計五体なんです。たとえば源氏物語に登場する女性はすべて、その三体で演じ分けていくらしいですね。それぞれの心が果たして舞台の上でどう描かれていくのか、私自身とても楽しみにしています。」



入場無料(要事前申込)

11/3 (月・祝)

チケット発売記念トークショー

グランシップ開館5周年記念事業

夢の浮橋 ~人形たちとの「源氏物語」~

PM1:30開場 PM2:00開演

グランシップ 6階交流ホール

【出演】佐藤信(作・演出)、山口小夜子(人形デザイン)予定)

12代目 結城孫三郎・3代目 結城一糸(結城座)

【聞き手】山本肇(グランシップ館長)

P9・25参照